會報

會岳山本日　126　昭和18年9月

山岳兵下地のために

西岡一雄

敵國アメリカにも山岳兵らしきものがあつてアリユウシヤン方面に表はれ吾軍を相當に惱ましたとかいふことを私は洩れきいて今更の如く狼狽に肖たものを見苦しくも禁じ得なかつたのである。ドイツやイタリヤには既に現存したことのあるは、それが映畫化されてゐることにより十分に承知してゐた。ところがアメリカの如き相手國が我をおいて先鞭をつけたといふところに輕からぬ驚駭と狼狽とがあつた譯である。

そのアメリカの山岳兵なるものは、どういふ風な裝備をし、どんな兵器をもち、どんな訓練をうけ、どういふ素質のものであるかを知りたいが、思ふに歐洲の精兵に範をとり資材に物を云はせたもの位と考へたい。かうなると日本も最早や便々と安閑な日を送つてはゐられない。研究考案の時期は過ぎて直ちに實施の境地に入つたものと考へて、よりよきものの完成へと急ぐべきであらう。

第二次世界大戰に於て、日本の軍隊は未だ曾て嘗めたことのなかつた五ツの戰闘を體驗した。飛行機戰、市街戰、敵前上陸戰、ジヤングル戰、そしてこの山岳戰であつた。日本陸軍では山岳兵といふものが他國にはあるといふことは十分知つてゐたであらうが、それが吾軍にとつてどう作用するかといふ研究に迄はまだ距離があつて手が届きかねてゐたと考察されるが、事變以後、太行山脈に、盧山々岳戰に又南方ビルマ戰に於て、平地では味はつたことのない勞苦多き戰闘を重ねて、ある者は知りつゝ、ある者は知らざる中にも、山岳兵がもつべき技能、動作、兵器、裝備、訓練の必要を痛感されたことゝ信ずる。先覺者はそこに眼をつけ、其頃よりボツボツその下地に手をつけ始めたやうではあるが、氣負ひ立ち勇氣凛々たる將兵達は、山岳人がもつ位の技術と經驗位は、日本の精兵にあつては何でもなく、千山萬岳の峻險なりとも、この健脚は容易く突破しうべしとなし、又岳人がもつ位の用具よりは一層精鋭なるものを軍は已に研究してゐるといふ位の滿々たる自負はその當路の人々にはあつたことのやうに考へられるのである。しかし私のいふ技術とは決してあり餘る力ではない、頑張りや無理押しの臂力ではない。即ち技術なんである。力のある人が力をセーブし、元氣ある人が我武者羅を押へて輕くこなし生かす技術のことであつて、そのセーブし蓄積した餘裕の力を生かせて專ら次の攻擊に集中することの出來る凡百の登山技術なんである。これだけは多年の體驗と練習とにより登山家の方に一日の長ありと信じた。軍は自己を空うして實地につき山岳人のある者を動員して、その術を會得し、必要なるものをとり入れ、軍の作戰に寄與すべき用具裝備を生す研究をゆるがせにしてはならぬと思ふ。これは單純に岩登り術だけを指すものではない。あらゆる廣汎に亘る山の技術について共同研究を促進すべきである。

山岳人が登山報國を叫び軍への協力の一つの表はれとして專らこれ行軍にいそしむのはよい。しかし自分の考へはそういふ風なものは獨り山岳人でなくても出來ることであるのみならず、むしろこれは國民運動として全國民が協和協力しなければならぬ大きな事柄の一つであるべきものである。山岳人だけが又山岳人でなければ出來ないことを山岳人は何を捨てをいても爲してこそ登山報國の實に叶ふといふべきである。それはむしろ、あるくことよりも、登山者のもつ廣義に於ける技術、裝備、用具を軍用として生かす共同研究にある。あるくといふ實踐は無論のことゝして、むしろ山を輕く上下し得る、あるき方の高等技術、山を見る勘の働きの方にこそ登山者の本分はあると自分は思ふ。同じく澤を溯行するにしても、それを强行しては所詮强い兵隊さんには及び難いが、瀧の側壁をなす岩の登攀、渡渉地點の發見、岩壁のヘツリ等、登山法の奥義を傳へて、かういふところは登山者はかうするといふ骨を授けてあげる方が登

目次

●山岳兵下地のために　西岡一雄…一
●登山年譜資料管見(五)　沼井鐵太郎…四
●子供連れの燕槍縱走　吉澤一郎…六
●對山館—思ひ出すこと　西岡一雄…八
●會員通信……九
山本雄一郎・横山直介・松山武貞・望月達夫・山本敏三・松方三郎・土田新一・佐藤テル
●圖書紹介—山と人と生活　一〇
●會務報告其他……一一

山家らしき登山報國となり、今後の參考にもなることゝ信ずるが故に自分は主にこゝ十年來その提携を唱和してきたのである。

不幸にしてかくいふ私は軍籍に身をおいたものでないから、兵器、裝備、教育、何一つ知るところがない。漠然と軍の當局は科學者、技術家を動員して精巧にして恐るべき兵器を折角研究になつてをられること位しか知らない者である。それ〴〵に必ずや、かういふ特別な山岳兵の如きものに就いても私達が心配し考へてゐる位のことは十分に先刻研究しつくされてゐるとも想像はつくが、本當に功名心を空うして、只管日本陸軍のために、若き將校達が體驗ある山岳人によく物を訊いて共に實踐に又研究に專念されるならば、日本の山岳兵の基礎は愛に固り、後は軍の努力一つでよき推進を續けることゝ信ずる。最初の一歩に衆智をつくすことはやがてよき實を結ぶことゝ思ふ。

抽象論はもうつきてゐる筈だ。具體的に一々私見を述べて見たいが、前述の如く私には、軍隊につき殆んど知るところがなく、又今後の軍の動向、意途、作戰地等は勿論判斷さへつかぬ位だから、それに適應せる登山具の應用、裝備に關しても答へられない。專ら登山家の中、有要なる人々が集團して、軍よりの諮問に對し直ちに答へうる共同研究團をつくり平素より軍と連絡を保ちつゝその研究を進むべきこと、その登山家中の中堅有爲の士は進んで軍と行軍を共にして實地につき、その持てる技術を軍に捧げて助力を示すことが、山岳人のお國に盡す此際の仕事であらうと思ふ。自分は素人考へとして、いろ〳〵な軍の場合を忖度の上、私案の一端を洩す外手がない。

一、ルツクザツクの採用

山岳兵は當然ルツクザツクを使用すべきである。形と大きさとは、その内容をなすべき兵器、携帶品の細目によりて定るが、自分はそれを知らぬから書かれない。しかし基本的には、ポケツトなき中型キスリングがよいと思ふ。表面必要な個處にところ〴〵紐や皮をつけて、ピツケルや銃器や圓匙をさしたり脊負つたりする。このために外面のポケツトは邪魔をするからとる。ポケツトを必要とする如き小物入を必要とするならば、むしろ前面胸部に適當な大きさの袋をつくりこれに藏する。恰かも禪僧の頭陀袋の如きものをルツクの擔紐に裝置するのである。（ズダルスキー式袋）しかも外側のポケツトは登攀に不便なるのみならず、袋の内面を壓迫するから收藏物としての内容はあつてもなくとも大して變りはないから、むしろ取付けざるを便宜とする。

二、靴の改良と打鋲法の研究

百姓の子弟が草鞋をはいては十里の山路を平氣にあるくのに、同じ子弟が軍靴をはいては數里の行軍に足を痛めて落伍するのは、靴に馴れないといふ計りではなく、軍靴その物に根本的缺陷があるからだと思ふ。その研究對策、殊に登山、スキーといふ立場から見ての軍靴、それの打つべき鋲種と打鋲法。これにも軍の作戰地の地質地形の作用が大きいから、自分としてはいふべき術を知らないが、原則としてムツガの小鋲、或は一の特異性能をもつ鋲を考へて見るか。

三、登攀具の研究

ロープの太さ長さとその材料

ピトンの形狀と寸法、その他、

繩梯子、鈎竿の類。

四、野營法とその附屬品

天幕の形狀、ナタ、ノコ、照明火器一般、天幕は雪中用、夏季用、携帶用、前進用、其處迄も考へておいてよい。其他雪洞、地物地形の利用法の研究、照明用としての電機、ランタン、松明として樹脂等々、寢袋とシーツ。

五、裝備、雨具、その他

スキーに關しては、根本論として、スキーを採用すべきか、ワカンヂキにすべきや、或はその兩者を併用すべきや、これは專ら今後の作戰地の地形雪質によつて自ら決定さるべきものと思考するが、何れにしても、計り知れざる今後の作戰に對しては、その各々に就きても十分なる研討あるべきことゝ信ずる。

一、スキーの形狀と長短

一般論として短スキーを提唱す。持説として五尺五寸、五尺八寸（何れも實寸）の二種、各の身長と任務とにより決定す。スキー靴も同一標準による。兩方共（イ）又は（ロ）の番號をうち、（イ）靴をはく兵は（イ）スキーを、（ロ）靴をはく者は（ロ）スキーを使用す。從つて民間大衆のスキーもこの二種に決定し、この基準寸法以外のスキーを許さゞること、靴又同じ。而して一端風雪急を告げなば、立ちどころに民間スキー具一切を召集して軍器として使用しうるやうにする。色は黃色又は白、（折疊式に完全を期しうればこれが採用を辞せず。その時はスキーの寸法に別の考へを要す）。巾は稍ひろく、平型にてよし。（寸法の細目はスキーの長短により自ら定る）

二、締具と修理具

主としてフイツトフエルト式によると雖も別に軍は獨特にして最簡便なる締具の工夫あつて然るべく、普く衆智を動員すべき也。

三、兩杖、竹、寸法もスキーにならつて長短の二種類。特に折れ難き工夫、石突と竹との接觸面竹の内部に木を挿入して强化を計るなぞ。

四、スキー靴

大小二種の用意は前述の如し。現在の智識に於ては現在のスキー靴以外に吾等の考へは出てこぬが、スキー締具の特殊の簡便化により、それに靴を合一させるためにスキー靴も亦大變革を行ふべき乎、其他オーヴアシューの採否等々。

五、裝備と防寒具、炊事具

外套は各國のスキー兵や、外國の登山具型錄等を參考として工夫する。私案として愛に二種を提供する。その一つは

將校マントに肖て袖から兩手が出るもの、北滿の守備兵のきるものに肖て而して非なる形のもの、これはミツチランガ、、カウバの型錄にある。今一つは北邊の守りと題する繪ハガキに出てゐるものと略同一、ルツクザツクを擔つた儘その上から羽織るもの、脊中の中央に當る邊にマチが入れてあるから、この外套は相當に廣狹自在である。

六、鐵樏と輪樏

鐵樏は幾本爪を可とすべきや、靴に直接植付けるか、紐にて締めつける方法によるか、その形は？ 鋼質は？ 輪樏とスキーとの優劣は專ら使用地の地形、雪質、雪の深度等にもよるから日本の作戰地により、どちらかゞ採用される譯であるが、若し輪樏にのみよるならば、材料、形狀、大きさの研究が必要になつてくる。しかしその根本問題は固定式採用か遊動式採用かである。

七、地圖の作製、特に山岳用として雪崩や難路を主とせるもの。

以上の私案は何れも一登山家としての机上の論である。軍には軍として携行品や立場があるから、よく比較研究を進めるのは勿論であるが、研究は實際に軍について行軍して適否を決すべきである、一丁のナタ、一本のノコと雖も各地の物をとりよせ、今一分刄を廣くし重量を增せばどうなるかといふやうな風に議論を運んでゆくとよい。スキーにはシールを併用すべきや、又はワツクスを可とするか、現在日本軍隊は何れを採用してゐるかさへ自分は知らないが、私としてはシールに左袒し且つそのシールは最初よりスキーにはめ込める物をすゝめたい。そうなるとそのシールの長さと巾が微妙なる問題となり、それがスキーの速度に大關係を來すから輕率に決定し難くもある。

飛行機が陸海軍に分れて各々その研究を競つてゐる。そこに不便もあり冗費もあらうが又獨特の進歩もある如く、スキーも目下のところ各々その立場に卽して各々の研究があるらしい。卽ち陸軍は短く、海軍は概して長スキーらしい。その作戰する地がちがへば、その使用スキーも亦ちがつてよい筈であるから、これは尤もであるが、目下海軍が注文して坊間つくらせてゐるルツクザツクを自分は見て知つてゐるが、それは私達の間に通常三六瓢として通用してゐる三尺八寸位、ポケツトを三つ眞正面に並べたものである。海軍の用途が判らぬから批評がましいことは愼しみ避けるべきである。只あんなものでは市賣品を一歩も出てをらず、しかも登山家中でも試驗濟みのもので、今日では省みられざる形であつて僅かに、渡滿者流、田舍買出し部隊者、或は登山には關係なきツーリスト乃至は青年團あたりに僅かに命脈をもつものである。加ふるにその製作の粗漏はこれが軍隊のもつ物の一つかと一驚を喫するのみで吾等は嗟嘆なきを得ぬしろ物である。

爰に於て吾等に義憤が起る。第一軍器の如きものは(廣義の)民間營利者を極力さけて、責任者の監督の下に製作をすゝめねばならぬ。今日の兵器は民間でもその一部はつくつてゐるが、これには必ず監督がある。しかるに、スキーやルツクザツクの如き物は餘りに輕視されてゐる爲めか、眼に餘るひどい物をその儘納めてゐる。これでは全く用をなさぬことになる。商人は惡德といはんよりは全く赤心を缺く賣國行爲に外ならぬ。

第二は、登行家の御奉公として、軍に協力し山岳兵の研究をすることは前述の如し。ある者は應召されて囑託となり、その蘊蓄を傾ける。又別に民間の山岳人を動員して、その研究事項をあげて依囑し自由にして獨自の見識の基にその研究をなさしむべきこと、自由とはいへ、常に軍の意向が正しく反映されてをらねばならぬことは無論である。

きくところによれば、幸ひ山岳兵については軍關係者に於ても既に十分の理解と熱意の下に、荒木、鈴木、小笠原、新村氏の如き吾等が尊敬せる先輩に訊きたゞし、その完成につとめつゝありといふ。眞に賀すべきことであつて、人もところを得て兩者の意氣がシックリと投合してゐるから爰に良きものが生れくることゝ信ずる。軍はよりよき物のためには現狀のみで滿足せず、もつと〳〵胸襟を展げて各方面各人に訊き、願はくば野に遺賢なからしめねばならぬ。登山の先覺大家達も此際自分といふものを空うして持てるものを捧げて御奉公の實をあげるべきである。(十八年八月八日)

行軍の如きは何も登山家でなくとも他に指導しうる實力者は多々あらうと信ずる。唯登山に關する限り登山者自らの體驗は他人では出來ないことであるから或者はそれを以て直ちに軍と行動を共にする、或者は机上論を戰はして裝具につき成案を以て進言する。これこそ絕大の登山報告といはねばならぬ。「たつた一人の山」「山谷放浪記」の放浪やたつた一人といふ文字が、いけぬとかいふ話をきいたが、そんな馬鹿氣た揚げ足どりの如き批判は糞にもならぬ。今日の場合、そういふ時局阿諛者や便乘者がウヨウヨゐる。云はんと欲する重大事は他にもつと多くある。お互は自己を空うして各々の分を眞實に盡さうではないか。

會報の原稿依賴

（編輯係）

會報については種々御配慮を下され有難う存じます。最近は御かげさまにて十二頁で毎月出すことが出來ましたが、十月號にはとつて置きの原稿もなく又心細くなつて來ました。

會報の執筆者の顏ぶれがこの所片よつてゐるといふ御忠言を受けました。毎月發行の日限があるものですから先づ集まつてゐるもので纏める樣になりますが、せいぜい氣をつけます。今は以前と異り山へ行く機會も少なく又何か書かうといふ心持になる事も少ない上に大ていの人はいろ〳〵の用事が多くなつてをりますから、いつそう御ねがひしにくいのですが、會員の授助によつて毎月繼續出せるやうによろしく御願ひ申上げます。逆に、暇の多い時必ずしも書けるものではなく此樣な時節に却つて書きたい心持にもなり又說を述べる必要もあるとも言へると思ひます。會員通信も山へおでかけの時だけに限らず、見聞さるゝ所を御知らせ願いたいと存じます。遠く戰地から頂く通信はいつも有難く思つております。又その方々が會報の到着を樂しみにしてゐて下さるので張合ひがあります。

登山年譜資料管見（五）

○明治四十年（皇紀二五六七年、西暦一九〇七年）日本登山年譜資料（其の四）

沼井鐵太郎

〔乘鞍・御岳の部〕

乘鞍岳

八月上旬。辻本滿丸、星忠芳？山岳二の三（明治四〇、一一）一七三。——四日白骨泊—六日乘鞍岳野營（大雨）—二六〇〇米地點より下山野營—八日平湯泊—蒲田泊—中尾峠—（槍）。

八月中旬。榎谷徹藏。山岳三の一（明治四一、三）一七二。——平湯—十日？乘鞍岳—白骨—島々—上高地—槍）。

乘鞍岳・御岳

七月下旬。石川丈助（本會々員）。山岳二の三（明治四〇、一一）一七六。——木曾駒登山後。

御岳

七月。増田吾助、角倉邦彦、守田豊藏（何れも本會々員）。山岳二の三（明治四〇、一一）一七六。

七月下旬。久留島徵（本會々員）。山岳三の一（明治四一、六）三二—三九「木曾御嶽行」。——（木曾駒）—二十九日木曾福島—アイドウ峠—七合目小屋泊—頂—二ノ池—七合目泊—福島。

〔木曾山脈の部〕

駒ヶ岳

七月下旬。石川丈助、河田杰、案内者長江藤太郎（宮田）。山岳二の三（明治四〇、一一）八〇—九一石川丈助「宮田より木曾駒ヶ岳に登る」、同右一七六。——二十二日辰野より馬車—松島—坂下（伊那町）—馬車にて—宮田泊—太田切川に出て赤穂口と合す—駒飼の小屋泊—寶劍岳—小屋—本岳—玉窪小屋—上松—（御岳・乘鞍）。

七月下旬。増田吾助、守田豊藏、角倉邦彦（何れも本會々員）。山岳同右一七六。——駒・御岳登山。

惠那山

（何）月。永田隣山人。山岳三の二（明治四一、六）一四一。——川上に宿泊して登山す。或は明治四十年以前ならむ。要再調。

〔甲斐駒山脈の部〕

駒ケ岳

明治三七—四〇年？。房州清澄寺の行者兒玉妙開。駒ヶ岳參籠四ケ年、夏は山に冬は麓に修行す。國民新聞（明治四〇、一二、一〇）山岳三の一（明治四一、三）一二三—一二四。要再調。

七月下旬。鳥山悌成。梅澤親光。武田久吉、河田默、案内者篠田與一、人夫伊澤金治、志賀順藏、森末松、篠田政雄。山岳二の三（明治四〇、一一）六四—八〇鳥山悌成・梅澤親光「白崩山に向ふの記」、同三の一（明治四一、三）六二—七七鳥山悌成・梅澤親光「白崩山に登り駒ヶ岳を降る」。——二十三日高遠泊—黑河内—前宮（白崩神社）—戸臺—黑川を遡る—三ツ石—赤河原—大岩の小屋野營—藪川谷—野呂川へ越へる道？—仙丈登りは路線不明で失敗—大岩小屋泊—二十六日刀利權現（六合目）—駒絶頂—人夫二人元へ戻り外七人は摩利支天へ—屏風岩—尾白川—臺ケ原泊—日野春驛。本行紀行により左記三事項を書き拔き、今後の再調査を期す。

「昔し白崩へ登つた白衣の人が多かつた爲であらう處々に石を積み重ねて……」。山岳二の三（明治四〇、一一）七四。

東道篠田與一は「十三歳を此岳への初登りとして此年五十三になるまで幾度となく御山登りをやつた、大先達には……」。山岳三の一（明治四一、三）六三。

「道は……野呂川の小屋行の米を運ぶ爲に去年は人夫が通つたさらで……」。山岳同右七七。

鳳凰山・地藏岳

七月。子年男。山岳二の三（明治四〇、一一）、五六。——觀音岳に「奉納地藏菩薩、明治四十年七月三十日大願成就子年男」ト刻せるものありし由次項辻本滿丸の紀行に見えたり。要調。

七—八月の交。東京學生二人、案内及人夫三人。山岳二の三（明治四〇、一一）五五。——（芦倉—白峰）—八月二日地藏岳（辻本・星の一行と會す）—鳳凰—。要調。

八月上旬。辻本滿丸、星忠芳（本會々員）、案内者牛田五郎作。山岳同右三八—六三辻本滿丸「鳳凰山第二回登山記」、同四の一（明治四二、三）一一三—一一四辻本「鳳凰山にて採集せる植物の目錄」。——七月三十一日日野春—柳澤泊八月一日ドンドコ澤源野營—御室跡—山稜—鳳凰山地藏佛—地藏岳—觀音岳—藥師岳—觀音岳—砂拂—御室（南御室）—青木湯泊—御座石湯—柳澤—。

右文献によれば、柳澤宿帳に登山者の記載絶無なりしと云。明治四十年だけに就てか其以前迄も含めてかは不詳。尙前項紀行の第一頁には「柳澤口……近況記述せるものなし」柳澤口が登山の本道なりしことは……」の文字あり、注意すべし。要再調。

〔白峯山脈の部〕

白峯山

七月下旬。東京學生二人。案内及人夫三人。（以上前出）。山岳二の三（明治四〇、一一）五五。——芦倉—白峰—（地藏—）。要再調。

白萩山・田代川上流

八月上旬。小島久太。山岳二の三（明治四〇、一一）一七六、一—三八「甲斐山岳の形態美」。——二日湯島（早川溪谷）—白萩山—田代川上流横斷—奈良田—柳澤村—。農鳥、間ノ岳、鳳凰山登山の目的を風雨のため果さず。

〔赤石山脈の部〕

塩見岳

八月下旬。御料局役人、案内者小松辰吉。山岳五の一（明治四三、三）一三四。——塩見岳に行きたる際人足の一人凍死せり。

赤石岳

七—八月。萩野音作（本會々員）、酒井政衛、湯澤重一、原誠人、中山彌次郎。山岳二の三（明治四〇、一一）一七四—一七六、同八の三（大正二、一二）五六。——七月二十六日東京發—高遠—市瀬峠—鹿塩温泉泊—大河原泊—八月二日小澁—廣河原野營—大聖寺平東ノ谷野營—四日赤石山—小澁温泉泊—大河原泊—飯田—時又泊—天龍川舟行—二泊—陸行して—永窪泊—西渡—十一日舟行—中ノ町—十三

日歸京。

（何）月。大河原赤岳會三十八人。山岳二の三（明治四〇、一一）一六七。——赤岳會の第一回登山で七月登山か。要再調。

大河原赤岳會。前項文献によれば「信州下伊那郡大鹿村大河原區字市場住民により赤岳會組織，大河原小學校内に事務所、村會議員松川松太郎會長、太田米雄副會長、同小學同窓會員三百餘名、赤石山の登攀を目的とす」。

〔白山の部〕

白　山

七月。石崎光瑤。山岳四の一（明治四二、三）三一、同六の一（明治四四、五）八四—八五。——加賀國—白山—裏山越—飛騨平瀬。小白川溪谷は籠渡し。

〔近畿の部〕

伊　吹　山

（何）月。川崎義令。山岳二の三（明治四〇、一一）一一五「伊吹山」。——既に十數回登山す。要調。

「本夏の如き日に數十百の登山客を見るに至れり」。山岳同右。

「上野口、彌高口、太平寺口、上平寺口、古屋口」の五登山道が利用されてゐた。同右文献。

比　良　山

五月上旬。榎谷徹藏。山岳三の一（明治四一、三）一七二。——三日近江木戸村より登山。

大和の高見山

三月下旬。榎谷徹藏。山岳同右。——二十八日尺餘の積雪中を登山。要調。

〔中國地方の部〕

大　山（ダイセン）

八月上旬。八木壽治、松原久吉、山根譽四郎。博物之友五〇（明治四一、三）八三—八四、八木壽治「伯州大山の植物」。——六日より五日間植物採集登山。要再調。

八月中旬。塚本永堯（本會々員）、豊岡某、案内者某。山岳二の三（明治四〇、一一）一七六、同三の二（明治四一、六）二七—三二塚本永堯「伯耆大山行」。——十五日御來屋より登山。

大山は維新後寺領の返却其他の事情によりさびれて行つたが、明治末期に至つて、「近年登山熱の流行せると中國唯一の高峰にして風光の秀麗明媚なるとは幾多の人心に投じて或は單獨或は團體を造りて登山するもの年々多きを加ふるに至れり」（前々項文献）とあつて、明治四十年頃には相當登山者數のあつた事が判る。

〔四國の部〕

屋島山・五劍山・岩手山（伊豫）

（何）月。佐藤傳藏（本會々員）。山岳三の一（明治四一、三）一七二。——低山ではあるが、右登山家專門の地質調査であつたと思はれる。要調。

〔九州の部〕

對島御嶽・有明山

（何）月。佐藤傳藏。山岳三の一（明治四一、三）一七二。要調。

英　彦　山

明治四十年？（何）月。手島漂泊。山岳同右一〇八—一一二「彦山の裏道」。——久留米—日田町泊—耶馬溪—大南不動堂—鬼の岩屋—頂上。記文熟讀するも年月並に下山路線共に不明。要調。

英彦山・阿蘇山・東霧島山・櫻島岳・溫泉岳・高良山・天拜山

七—九月。高頭式、那珂通世（本會々員）。山岳二の三（明治四〇、一一）一七四。要調。

由　布　岳

明治四十年？（何）月。後藤鶴水、加藤警部、宮本技手、小川技手、江口某の一行と中學生四人組と同行。山岳三の二、明治四一、六）六八—七五後藤鶴水「由布登山記」。——別府—觀海寺道—猪瀬戸—嶽溫泉泊—頂上—飯盛岳東方—猪野瀬戸。春季かと想像されるが、年月紀行に不明。

阿　蘇　山

八月下旬。牧野富太郎（本會々員）。山岳二の三（明治四〇、一一）一七六。要調。

（何）月。山崎直方（本會々員）。山岳同右一七三。——滿洲旅行後熊本より入り登山後豊後に出づ。要調。

虛空藏山・多良岳

八月。牧野富太郎。山岳同右一七六。——要調。

溫泉岳・兩子山（國東半島）

（何）月。佐藤傳藏。山岳三の一（明治四一、三）一七二。——要調。

霧　島　山

（何）月。山本貞之助（本會々員）。——山岳二の三（明治四一、一一）一七三。都城—祓川—東霧島山—霧島溫泉滯在數日—西霧島山。要調。

開　聞　岳

明治四十年夏季（何）月。文學博士那珂通世、鹿島某、案内者。山岳同右一四七—一四九那珂通世「薩摩輪遊記の一節」。——七日坊津—網代—顯娃（エイ）村十町區脇—開聞岳—下山の途日暮れ野營—道を發見—脇。年月不明。要調。

屋久島宮の浦岳

明治四十年？（何）月。鹿兒島山林事務官島眞一の一行。山岳二の一（明治四〇、三）一七二。——宮之浦に上陸—五里山行—安房。登頂の記事なし。年月不明。要調。

〔朝鮮の部〕

白　頭　山

六月。北青守備隊。山岳五の一（明治四三、三）二〇四。——北青は咸鏡南道の一部。白頭山上定界碑附近木標に文字ありしと云。要再調。

（何）月。全通譯。山岳同右二〇四。——要再調。

〔臺灣の部〕

中央山脈中部

九月中下旬。能高越地域横斷。近藤勝三郎、蕃人若干名。山岳三十四の二（昭和一四、一一）一一（沼井鐵太郎「臺灣登山小史」）。——十二日埔里發二十八日臺東に出る。中央山脈中部横斷路線探査の總督府命を受け、前年西側を殺線迄往復した賀來警視一行の初志を改めて完遂した。

新　高　山

十月。米國領事アーノルド夫妻。山岳同右九（同右）。——陳有蘭溪・八通關よりの路から登山。アーノルド夫人を以て新高山而して臺灣高山女性登山の魁と見る。

十月頃。藤田組中里某、吉田某。山岳同右九（同右）。——前項前々項共詳細要再調。

以上て内地並に本邦領土は終るが、次に明治四十年海外に於ける本邦人の登山探檢業績を錄する事にしやう。

〔アジア大陸の部〕

オホツク・堪察加

八―十一月。鈴木陽之助。地學雜誌二〇の二三四(明治四一、六)三九五―四〇二及二三五(七)四六九―四八〇「オホツク及堪察加沿岸視察談」。――カムチヤツカ内部には入つてゐないが、專門家として「クリユチエフスカヤ一六一三〇尺、噴火山主なるもの三十八(内十四活火山)」を注意してゐる記事がある。

九　嶐　山

明治三十九年九月―四十年二月。工學士關野貞。地學雜誌一九の二〇二(明治四〇、六)三六七―三七四及二二四(八)五五〇―五五六「清國河南陝西旅行談」。――建築專門家の旅行であるが、九嶐山絶頂(北支、約五千尺)には唐の太宗の昭陵あり、此は山上に陵を立てた最初のもので、山は富士山のやうな形で一層急勾配であると書かれてゐる(上記文献五五三―五五四頁)。要再調。

前項と同時季。大谷光瑞。前項文献。――山下にキャンプして二週間滞在研究中であつたと云。要再調。

戈壁沙漠・新疆省・天山

明治三十九年?六月―四十年五月。林出賢次郎。地學雜誌二〇の二二九(明治四一、一)二三―三一及二三〇(二)七六―八九　清國新疆省旅行談」。――六月神戸發―辮髪をつけて北京發―西定まで汽車―輿に乘つて山西省太原―西安―山越二十日餘―蘭州―肅州―嘉峪關―安西―戈壁沙漠―哈密(天山南北路の分岐點)―バヲコダ山下―吐魯番―烏魯木齊(ウルムチ、廸化、バヲコダ山の北)―マナス―クルカラウス―天山を越ゆ(絶頂サリムノル湖)―伊犁―タルバガタイ―クルカラウス―ウルムチより六十四日を經て―鄭州―汽車で北京歸着。

〔南洋の部〕

プラタス島

(何)月。西澤吉次(其隆在住)。地學雜誌一九の二二五(明治四〇、九)六八九―六九〇「邦人の支那海孤島探檢」、同二二六(一〇)七六〇。――信天翁捕獲目的にて探檢に成功、日章旗を立つ。――登山の記錄なく、山も著しくは無い島だが、昭和時代に日本領と決定した新南群島の事であるので此處に錄する事にした。因に本島は明治二十七八年戰後屢々邦人に探險を企てられたるも始終目的は果さなかつたが、明治三十五年既に邦人によつて發見され、其後水谷新六によつて探檢された事を附記して置く。

〔アフリカ大陸の部〕

北アフリカ・チユニス・アルジエリー

七月。林學博士本多靜六。通辯同行。地學雜誌二〇の二三六(明治四一、八)五二九―五四五。――一ケ月に渡るイタリー旅行後―ネープル(ナポリ)―シヽリー島バレルモ―チユニス―コンスタンチンと經由し、其の間北亞にて馬上三度六千尺の高山に登り、森林を視察す。

――――――――

〔明治四十年登山記錄の通觀〕

調査洩れや檢討是正を要するものが有る事は勿論であるが、茲に登山家的立場から通觀して見ると、最も注意すべき登山は、何といつても飛騨山脈北部の劔岳の登頂であらう。先人の遺跡が發見されて、今更修驗道登山の日本的性格の强さを知つた。他面記錄的に考へて恰かも歐洲アルプスでマツターホルンが初登されたと同じやうな時代に當時の日本登山界が位置してゐた。即ち著しい巨峰の未踏峰は劔岳登攀を以て登山野心家の前に消えたのであつた。此の劔岳登攀を廻つて柴崎氏と登山家との間に一つの論爭があつたが、明治時代其の日其の時の初登先頭者が何人であつたにせよ、柴崎測量隊として其の榮譽と記錄を主張する事は當然であると考へる。劔岳に次いでの注意すべき記錄は、北海道では大雪山(又タクカムシユベ山)への學徒團體登山、奥羽では本年故人となられた大平晟氏の飯豊川筋よりの飯豊山登山、淺間山團體登山、大島三原山に於ける遠征形式による科學的長期調査、富士山一月の佐藤氏一行雪中登山、井野英一氏等の黑部東澤から二大山脈を越えて中房への行、十二月燒岳雪中登山、本會先輩諸氏の西側からの甲斐駒、辻本氏のドンドコ澤からの鳳凰山、北青守備隊の白頭山登山、近藤勝三郎氏の豪灣中央山脈中部横斷、海外では林出賢次郎氏の天山々脈越・新疆省一帶の探檢行であらう。

尙、明治四十年には山岳遭難が妙高山棄で一回(墜落重傷)、槍見岳で一回(凍死)あつた事を知る。

(昭和十八、三、十四)

子供連れの燕槍縱走

―新設の西穗高山莊―

吉澤一郎

一昨年はハイヤーで颯爽と有明から信濃坂まで登つてしまつたのであれから中房を經て合戰澤小屋、燕山莊は非常に樂であつたが今年(昭和十八年)は諸事萬端窮窟でバスもハイヤーも宮前まで(約一里半)しか行かなかつたのであの陽蔭の餘りない中房道にすつかり頽を出して了ひ元氣な人達の姿を左に見乍ら吾々は釣橋を渡つて濁泉へ入り込んでしまつた。ハイヤーは有明、宮前間五圓、但し代燃車なのでお宮の近くの僅かな勾配があがれず吾々は五、六町遂に歩かされてしまつた。

温泉に一泊　たのは二十三年振りであつた。小中學の生徒が澤山來てゐて相當賑やかである。時間が少し早かつたので湯元や藥師堂を一應見學した。

翌日(七月二十五日)は早く宿を出て尾根道にかゝり水場や富士見の松や合戰小屋を經て燕山莊へ。十一時前に久し振りに赤沼さんに會へた。合戰小屋の蜜豆は相當優秀、カルピスの壜(空壜ではないと思ふ)が二、三十本並んでゐたのには驚いた。午後は北燕岳の方まで行つて見た。人が餘り來ないだけに高山植物は相當豊富であつた。以前下つた圓衛谷をつくづく瞰下ろしたがあんな所をよくぞ下りけるかなと今更乍ら自分の無茶を思ひ返してゐた事であつた。夜は持參のサーデインをあけて赤沼さんと葡萄酒をやる。可なり酩酊、二階の隅の六疊の間に戻つた。

二十六日は點呼で東京に歸へるM氏と別れ一行は八人となる。私が「山日記」の一〇四頁に書いて

置いた危險地に案の上二人の登山者が入り込んでもがいてゐるので本道はこつちだと教へてやるとリーダーらしき方は沾券に關つたらしくプツと眼れ面をして禮も云はずに通り過ぎてしまつた。去年白馬の雪溪でも丁度之と同じ事があつたのを思ひ出し大衆といふ形容詞を進呈せねばならない登山者の如何に度し難きものであるかをつくづくと感じた。大天井岳の横捲き道には一、二箇所もう少し手を加へて安全にせねばならぬ所があつた。今年は雪が少なかつたので二ノ俣谷の上部には雪がなかつた。

西岳小屋ではお茶が藥鑵に一杯五十錢、大水筒への水も同額、從つて藥鑵に一杯お茶を貰つてそれを大小の水筒に分けて入れた方が徳である。

天上澤乘越から時々雨にやられ乍ら東鎌尾根をひた登り、昔赤土の嫌な登りだつた所も今は地肌の岩が出てゐて鎖がなくてもどうやら濟みさうであつた。雨に濡れた急な岩登りは相當危險であつたが長男の謙一(十三歳)は頗る元氣、常に親父の後にくつてあとから登つて來る女子群の恰好をひやかしてゐた。長女梓(十六歳)の方が却つておつかなびつくりであつた。殺生への二つの分岐點も過ぎるとやがて岩登り地帶も終つて槍の根元のザラ場に移り間もなく肩の山荘、穂刈さんにも何年か會はなかつた。一緒に二月の乘鞍へ出掛けたのももう十何年か前になる。長い頤を出して帳場に腰を下ろしてゐる所を見ると息子さんが東京の大學へ行つてゐるとは誰も思ふまい。

小屋は少し手狹まである。今年は可なり前や入口などを擴げる豫定で人手の不足を苦面して材木を上げてゐるとの事。子供二人は流石に疲れたと見え穂刈さんの特製ベッドを占領して寢てしまつた。お蔭で御主人今夜は臺所へ追込まれる。南安曇の山小屋は飯が豐富で有難い。一般に腹が空いては錬成は出來ない。九時か十時頃迄りついた十人許りのお客さん、後から來て仲々寢場所の我儘をいふ。而も三時と曇しき頃最早大聲で或は黄色の聲で槍の頂上について語り出し早速穂刈さんに「御靜かに願ひます」をやられてゐた。槍は大衆の山である。穂刈さんたるもの亦骨の折れる事であらう。

近頃は日當の關係であらう案内人の數がめつきり減つてしまひ槍から穂高へ縱走する人でも殆ど案内者は連れてゐない。それでも昔に比べて岩に白丸を書いてあるので迷ふ人はなくなつてゐるとの事。

翌日は御來迎を/喰寄りの岩角で拜した。槍の頂上は早く登つた人達が立つてゐるので五分刈の頭の如し。人々が夫々の方向に出發したあとで吾々は悠り頂上を極める。北鎌の下り口にも針金がつけてあつた。子供達も元氣に上下。次いで南岳の方へ散歩に行く槍平から十八貫の材木を擔いで飛騨乘越に登つて來る人夫二人。小屋は金だけでは出來ぬものと知るべしか。

晝食後先の事を考へて下の槍澤小屋へ下る事にした。雪溪滑りも子供達は大喜び、親父のハラ〳〵するのも知らずに勇敢に滑つて來る。槍澤小屋には折井健一君の弟君が保養がてら采配を振つてゐた。泊り客は後から來たもう一組だけ。悠り湯に入つて赤沼さんからせしめて來た砂糖で特製紅茶を呑む。八人の内二人は九時頃肩を下つて上高地へ行つたので今は六人。

二十八日は愈々上高地入り。一俣小屋は無慘にも臺所だけを殘してあとはタ、キだけ。本年三月十八日東京の某大學山岳部員三名が布團もたゝまず槍を目指し溪間に煙の昇るのを見て急遽引返した所小屋は最早手のつけやうもない程燃えてをり夜十時燃え盡きる迄見守つてから下山したといふ。恐るべきは火の不仕末。山田さんの落膽や如何ばかり、弟といふ人に見舞金を出し珍らしいお汁粉の御馳走になつてから槍澤梓川の林道をひた下りに下る。女學生の登るものひきもきらず、天氣稍々不良。徳澤小屋で思ひもかけず茨木さんに會ふ。商大の學生は皆潤澤入りで居らず、吾々は茨木さんを加へて梓川沿ひの道を暢んびり下つた。

吉城屋で又汁粉、池まで往復して上高地へ。小梨平へ來たら矢庭に蓄音機の音、何しに上高地へ來るのか。西糸屋の穂高の間にくつろいだのは夕飯にはまだ少し早い時間であつた。夜は九時頃三階の中學生が騒ぎ出したので喚鳴りつける。

警報が出てゐるので廿九日は直ぐ徳本踰えにしやうかと思つたが茨木さんも一緒に行くといふので兎に角西穂高山荘まで登つて見る事にした。

庄吉の家の直ぐ向ふから右に入ると驀て玄文澤を左に瞰下ろすやうな道になる。靜かな秩父を偲ばせる登山道。時々雨が來る。茨木さんはチョイ〳〵スケッチ帖を擴げてゐた。支尾根の背に出で主尾根の側面を斜めに登つてその上に出ると燒への道が左に分れてゐる所へ出た。あと小屋まで二十分。小屋は飛騨側の外ケ谷の詰めにあり燒岳とはほゞ同高度にある。守さんとその家族がゐた。不意の珍客にすつかり喜び早速汁粉、信州は兎に角汁粉の豐富な國である。

今年開設した許りで看板がまだ書いてないから一つ頼みますといふので茨木さんに一任。槍の柾目板を擔ぎ出して來た。西穂山荘か西穂高山荘かで可なり考へたが結局後者を採用した。天氣が良くなつて來たので守を先頭に、棒の立つてゐる西穂の獨標の峯(第四ピーク)まで登る事にした。お花畑を見學する。上高地から見上げるあの氣持ちの良ささうな草付である。バイケイ草がはびこつてゐた。高山植物で一番癪に觸はるのはバイケイ草だとは守の說である。

獨標峰からの眺めは素晴しかつた。奥穂の頂に人が二人、それから驢馬の耳、ジャンダルム、天狗、中岳、三角點、ピラミッド、無名峰、そして獨標、岩の殿堂とは正に此處を云ふのであらう。歸途注意すると岩の所に時々アイゼンの爪の跡が見える。

看板に茨木さんのサインを入れ愈々四歳になる健一君等に別れる。西穂岳山荘の笠の眺めは忘れられない。來年も亦來やう。登り三時間といふが吾々は二時間五分で登り、下りは一時間と少しであつた。

最後の日は三十日、六時四十分に西糸屋を出發、上天氣に惠まれ吉城屋で茨木さんに分れ徳本は一

時間四十分でノン・ストップで頂上。大瀧の中村さんが働いてゐた。鯖留も仲々の繁昌、トロ道はレールがとれ枕木が大部埋つて歩きよかつた。然し島々本谷の合流點の少し下でレールがはじまる。結局島々發二時五十一分の電車を一人先行して貰つたS氏に少し引留めて置いて貰ひやつと間に合ひ、松本では入つて來た三時四十分に周章てゝ飛び込み辰野へ來る前に全部が腰かけられ斯くして子供連れの燕槍上高地行は無事終了を告げたのであつた。（一八・八・四記）

山日記漸く發賣

昭和十八年版の山日記が漸く發賣される事になりました。新刊弘報には十一月一日から十日迄の間に發賣とありますし、納本、檢印等一切が濟みましたから今度こそ確實に出る事と存じます。全く長くお待たせして申譯ありませんでした。先號會報には豫約注文の方々へ別に葉書を差上げたやうに書きましたが、實は誤りで、愈々發賣と決つたので葉書を出す事を中止しました。不悪。

尚新しく注文の方へ申上げますが、税金のついた關係上頗價送料共 **金一圓四十錢**（會員に限る）になりました。御諒承の程を。

對山館—思ひ出すことども（二）

西岡一雄

百瀬君は美しい人だと思ふ。獨眼たりと雖も烱々たる光りは人を射る。酒のためか血色のよい頰が艶々してゐる。白髪こそいたく增えたが少しも老けず年はふけてもいつも若々しい美貌の主である。酒量に就いては知るところはないが既に酒に淫すと迄の酒徒であるらしい。

百瀬君については何故か常に浴衣の人を連想する。これは私の一種の幻想かも知れぬが、浴衣以外の慎太郎氏は今の私にはない。唯この美貌に對して、派手な鎧を着せ一筋大身の槍を握らせて見たらさぞ凛々しい若武者が出來るだらうなアといふ氣がする。

數度の宿りの中、最初の二三度目位迄は全く氣持のよいあこがれの對山館であつた。この家を思ひ出す毎に、私の追想は大町といふ山の町に飛ぶ。山里にしてはひろすぎる柳の並木に火のともる丁、油煙のくすぶる市場、返へ馬がつながれ、白い頰かむりにくはへ煙管の馬子、そうした横丁を輕い浴衣に着かへた私達は片手を懐に差し込み、ふくれた嚢口をしつかと握つてあるき、凉を納れつゝ、青胡瓜を捜し味噌を買ひ牛肉の鑵を整へたりした。別の店で生莫蓙や金剛杖を求めてその散歩から歸つてくる。その夜の對山館は、どの部屋も、この町で集めた食糧品や草鞋と郡會から運んできた裝備品とでごつた返しの賑かさである。それを順序よく登山嚢に整理して、重量品や嵩高い品は人夫に渡し明日の早立に備へる。それを宰領する案内者も多忙であつた。一渡り荷物の整理がすむと、案内人を中心として大きな食卓の上に五萬分の一の地圖が擴げられる。いろいろな質疑や打合が行はれる。惡いときいては初心者の胸は慄き、美しいときいては眉が上つたりする。宿屋に於けるこの一ときも亦樂しいものである。萬事が故障なく整つて明日を希望しつゝ深い眠りに落ちる。爰で私等は有名なる案内人、勝野玉作、傳刀林藏を知つた。櫻井兄弟、伊藤亀一と苦勞を共にした。越中の人夫を爰迄伴つて酒をのませ御膳を薦めたのも玆のことである。他地方の宿屋ではこれだけのゆとりと落付きとは得られない氣がするのである。

私達古風な登山家はいそぐことを知ると共に又ゆつくりとふり返り觀賞にふけることをも忘れない。その爲めに入峯に先立つて一夜を根據となるべき地に泊つて先づ落ちついてから山に入る。又一山稼ぎ終ると、どつかの最後の山里にとまつて、骨を休め、山をふりかへつてその旅の追憶にふけり、しかる後御別れする。無暗と急がないのである。それは專ら交通機關の不備であつた昔だからとのみいひ去るわけにはゆかない。それもあるにはあつたが矢張り餘裕や分別や、特に個人の山への態度が著しい役割を以てゐるのではなからうかと考へる。個性にも甚くが、その時代の登山家氣風の反映が作用して今日迄牢乎として拔けきらない。それだから他處の人夫をつれてワザ〳〵かういふ宿屋に泊り込み、別離の杯を酌んで自分達は一夜の名殘りを惜しんだのであつた。

しかも他地方では絶えてこの事がなく、獨り對山館にのみこの記憶が度々あるといふことは矢張りこの對山館がどつか山の人達にとつて安易なそして落付きを與へるものがあつたからではなからうか。

今では全くどこの宿にも亡んでなくなつたやうだが、當時はまだ草鞋の旅が多數であつた故か、或は膝栗毛以來の仕來りか、旅先きの旅舍では必ず小盥に湯か水かを汲んで上りかばちに据えて旅人の足を洗はせたものである。たつたこれだけのことが限りなく旅情を濃やかにする。この風習は草鞋が亡び靴が榮えると共にどこにもなくなり今日では餘程の田舍へゆかねば經驗し得られない風俗となつたが、私等にとつては雜巾で足を拭くよりは水盥で足をすゝぐ方が幾層倍よいか知れやしない。對山館も最初の頃はこれであつたが、昨年一昨年と續けて泊つたときはどうであつたか記憶がない。

さて四度五度とゆく中に、對山館の容子が少しく變つてきたことに氣がついた。外觀的には、表格子のあつた邊がブチぬかれ、その一劃が喫茶室になつてゐた。この僅かな一つの出來事がこの宿の風格をいたく下げたやうに思はれた。時代の波がもう爰迄も押し寄せてゐたのである。純一な宿屋業のみでは生計の不如意が嘆かれたのであらうと想像するが、慎太郎さんの好みであつたとならば、私の粗忽は許されたい。勿論その頃に至つては、大町で斷れてゐたあの鈍行列車が既に立派な快速電車に移り四谷迄のびてゐたから、谷の方でも對山館の所在をぬきにして、それ〳〵のばす方向に急いだので、そういふ登山者達に適應するため一飯の好みを結ぶ喫茶室であつたかとも考へられもするが、

何にしても尙あらずもがなと思つたりしたのは濟まない氣がする。それに實際その頃になると泊り客の數は著しくさびれ、ひろい對山館が寂寥としてうら枯れてゐた如くに感ぜられた。しかも登山者でない客人がチラホラと見られるやうになつた。かうなると對山館は完全にその特色を失つたことになる。古い登山家は必ずや多少の感慨にうたれざるを得ない。それでも尙大した移りかはりもなく毎夏石川欣一氏あたりは一家をあげて爰に投宿し愼太郎氏との舊情はいよ〳〵濃く酒をさしては山の話をすると聽くものから、私等にはまだ〳〵安心はあつたが、とう〳〵今度廢業するといふ通知に接して、あゝ止んぬる哉といふ感じと同情と淋しさとが同時に私の胸をついた。

針ノ木、大澤の小舍はのこるといふが、それはもう私の安息所ではなく一つの避難小屋としてのみうつるのであるから、どうしても親しまれない。少し大袈裟にいふと日本の登山者は惜しむべき宿屋を失つたのである。吾等は今後と雖も大町にゆくことは必ずあるが、再びあの感激とあこがれと親愛とをもつ宿屋を求められないことを知るから、とてもゆる〳〵泊つてみる氣持がない。かくて永久に對山館なる名はこの國の登山史から忘れられて終ふだらう。

（十八年七月廿一日）

會員通信

北支より

山本雄一郎

暗雲低迷した日が續いた處一度晴れると初秋の碧い空に微風はやはり内地と同じであります。其後會員の皆樣にはさぞかし御苦勞樣と思ひます。會報七月號を手にして感想も新しく、次號を待つ樂しみこそ明日への鬪志の源泉であります。兎角讀み物に缺乏する我々には過去の幾多の生活が反芻され勝ちです。實は秋は多忙勝ちな戰線の波動こそは幾山河の昔の感傷すら戰ひの位置に高められねばならぬ時、此の兩者の不斷の戰こそ眞劍な日々を送る事であると確信してゐます。とかく戰地は心が荒み勝ちで人間的本能すら行動の對象にされる。自分の奥深く宿る山の存在こそは最も珍重なるものであります。

皆樣の御健康を祈る。

南にて

横山直介

兵馬倥偬とは云ひながら久しく御無沙汰致しました。皆々樣には益々御健鬪の事と存じ遙か南海の島より御喜び申上げます。小生も御蔭樣にて常に病氣とはおよそ緣遠く、學生時代の山によつて鍛えられた肉體と精神を以つて張切つてゐます。

さて南の山と云へばその高度に於てなか〳〵堂々たるものがありますので學生時代一應興味を感じた所もあり、それが次第に手近に生活に入つて來そうな氣もして改めて見直したく思つて居ります。Nggra Poeloe 等殊にその趣が深いです。これ等の山々が日本人の手になる紀行文となつて「山岳」あたりに掲載される日も遠くはないと思つて居ります。

尙軍隊の生活殊に最高の困難に遭遇せる場合のそれはよく鍛えられた山の生活が特つてゐると同樣な肉體と精神とを必要とするとはつく〳〵感じております。その意味に於て不及乍ら如何なる困難にも耐えやうといふ決意をもつて益々張切つてゆくつもりです。

皆々樣に宜敷く。

赤道の南より

松山武貞

前略。心ならずも永らく御無沙汰致し申譯なく思つてゐます。おかげ樣にて赤道越した南の地で御奉公申上げてゐます。

皆樣によろしく。

北より

望月達夫

御無沙汰御詫びします。既に大本營發表にて御承知の通り○○に轉進し元氣旺盛にて過しをります何卒御安心ねがひます。此處で御はがき二つ及會報第一二二號、第一二三號を拜見嬉しき極みです。會報大變結構です。あの位なれば實に申し分ないでせう。山岳會賞は殘念ですね。「山岳」は毎日首を延してゐます。當地は偃松あり、濱ナスの花咲き、小さい乍ら殘雪の山ありで中々山の氣分旺溢してゐます。それに岩魚が澤山とれて鮭や鱒と共にモリ〳〵食してゐます。元氣は益々良くなる一方。會員各位へも呉々もよろしく御つたへねがひます。では又。

内地に戻りて

山本敏三

拜啓　長らく御無沙汰致してをりました。應召後すぐ北滿の地に渡り、今回の大東亞戰勃發と同時にタイ國に至り、シンガポール作戰に參加、ヒリツピン、南洋群島を經てガ島戰鬪中不幸白衣の身となつて、今回内地に還つてまいりました。

○○○○部に屬してきた關係で、各地の圖書館等の書類整理や、又○○の調査に從事してきましたので、大分彼の地の山の書籍や、地圖類を瞥見し、低山乍ら○○○實地踏査で山々を歩き、得るところがありました。白衣の身となつて待望のニューギニヤの山に接する事が出來なかつたのが殘念です。

マニラの病院に入院中、月原俊二氏の詩や文を、渡部隊の「南十字星」誌上に拜見、懷かしく思ひました。會員の皆々より南や北に奮戰さるゝを會員通信にて知り、羨ましく存じます。此處暫く白衣を脱いで内地勤務です。出征中の

會員諸兄の武運長久を祈ると共に、内地在住會員諸兄のよき山幸を願ふや切です。

内地に還つて參りましたから、今後共よろしく。　草々

滿洲より

松方三郎

滿洲も蒙地に入ると地貌萬端一變し、甚だ氣分がいゝ。興安嶺ではエーデルワイスの群落の上を馬で歩いたなんていふと、憤慨するかも知れぬが、これは法螺でも何でもない。外蒙國境の山でも大分採取した。朝めし前に、馬を草原に走らせ、牛乳をのみ、羊の丸煮を平げるなどいふのは、昔にきく英國貴族も顔負けだらう。王爺廟で十日あまりを暮してきたのである。

（昭和十八年八月）

光德小屋行

土田新一

山に行くため時間の上で無から有を出すのは學生時代から得意とする所ですが、今度の光德小屋行は文字通り寸暇を盗んでの山行でした。せめて山の見へる所までと思つて東京を出たのですが運よく陸軍の乘用車や林野局の貨物自動車に便乘することが出來、槍倖にも素晴しい數時間を山小屋で過しました。小屋を根城にして頑張つてゐる山岳部の連中と久振りでストーブを圍み又牧場の婆さんにはミルクと、とつて置きのバターを御馳走になり思ひ殘すところなく又支那に飛行機で歸つて來ました。今南京で、たつた五日前の眞夜中には戰場ケ原を歩ゐてゐたのかと考へると「地理的空間のはかなさ」と云つたものを感じます。當分は筑波山の模型のやうな紫金山で内地の山を偲びます。

（一八・八・二三）

山形縣南小國村

玉川より

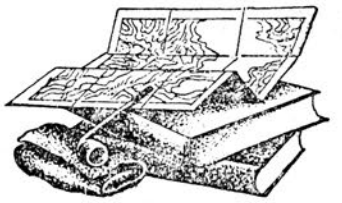
佐藤テル

鹿澤でYWの山岳會の娘達と行軍と山小屋炊事、植物等の錬成會をすませて羽越線の瀬波温泉へ御馳走をたべに參りました。果物やさいは少く、それでもりんごやぶどうはいたゞけます。野の草、山の食物漁りに米坂線の長者原へ參り食物に關するマタギの古い習慣をきいて居ります。玆はまだ夏に遠くトマトも南瓜も熟れません。御機嫌やう。　かしこ

× × × ×

會員通信には表題があつた方が見易く又索引を作る時（五〇號宛合本の際）に必要ですから、無い分には適宜付けております。又個人宛通信のうちにも了解を得て掲載したものがあります。御了承下さい。

（編輯係）



圖書紹介

高橋文太郎著　山と人と生活

本書の内容は第一章山と生活、第二章山の言葉と傳説、第三章山の信仰、第四章山と神秘と俗信、第五章結語である。裝釘は茨木猪之吉氏であつて表紙には同氏の筆になる山村の風景が畫かれてある。

結語に於て各章の説明並に著書の扱方が記述されてゐる。それに據れば、「山と生活」は山地で生活してゐる人々、狩獵者、木地師、農耕者等の生活に就てゞあつて、「採訪記の形式」をもつて記されてゐる。衣食住、年中行事等の生活事象が含まれ民俗學でいふ分類の第一部に相當するといふことである。この章の（四）に記された男鹿のナマハゲは正月行事の一例としてゞある。「山と言葉と傳説」の中には山名、地形名の研究と山の傳説について述べてあるが、前者は一五五頁―二六〇頁の百餘頁にわたり傳説の方は主として山の爭ひ傳説についてゞあつて六頁をさいてゐる。第三章と第四章とには禁忌の問題が多く取扱はれてゐる。

説明によれば現在の民俗學で第二部といはれる分類は主として言語藝術（民謡、諺、唱へごと、昔話等）を含めるもので、分類の第三部が心意現象の部門であるが、この部門が民俗學の中でも採集も研索も一番むづかしいといふことである。而してこの部を通じて人生觀、道德觀等を知ることが出來るといふのである。われ〳〵讀者に於ても山の人々の衣食住等についていろ〳〵知り得た後は彼等の精神についてまた多くを知りたいと思ふ。それらの氣質や物の考へ方等はこれらの各章を通讀の上は自らわかつて來るのではないかと思ふ。

われ〳〵山へ登るものゝ内には特に研究をしないにしてもこの樣な民俗方面のことに無關心な者は少ないと思ふ。山を所謂身體の錬成道場のみとして考へてはゐない。山案内を依頼すると否とに拘らずわれ〳〵は有形無形にこれ等の山の人々の世話になつてゐる。「人は山麓の村々を通つて山に登る」とは私が作つたアフオリズムであるが、事實山麓で不幸な人々に接して後愉快な山登りは出來ない。從つて彼等の民俗を知りたいといふのは單なる興味からではなく、少しでも彼等の苦樂を知り温い心を持ちたいからだと思ふ。

よく山案内などに就ても某地のものは使い難い又は某地のものは親切でよい又はつきあひ易い等の事をきくのであるが、それらのことは同時にその土地の位置や地形、氣候又は土質の貧富等、住民の歴史等を知る上は了解も出來、同情も出來ることがある。もとより不正なことについては寛大になつてはならないが、山案内や土地の人々に對する輕率な批評は避ける事が出來る。

それらの住民の事柄を知ることはこれらの方面よりわれ〳〵の山旅を豊かなものにする。又住民のこと以外のこと例へば山の名や地形等の名稱についても多少知つてゐるのと全く無智であるのとでは大いに異なる。地名の研究については以前柳田國男氏の著書を讀み又近頃は「日本地名の研究」（阿瀨利吉著）なども興味深く讀んだ。本書に於ても前述の如く百餘頁に渉つてゐて、山を歩く人々を啓發し、いつそう山旅をなつかしいものにする。私も白馬蓮華温泉の方

から大所の木地屋へ出るたびにそこの小椋氏のうちに休ませて貰つたのであつたが、今この本の木地師の所を讀んでいち〳〵當時を想ひ出したのであつた。

高橋氏は日本常民文化研究所にあつて多年この方面を專ら研究してゐる人である。「山岳」にもそのいくつかは發表されてゐる。私は民俗學の方面からこの書を紹介する人は他にあることゝ思ひたゞ山へ登る者の一人としてこの書を讀みその内容の大體を紹介した。

（十八年九月）（田邊主計）

× × ×

山と人と生活 高橋文太郎著
昭和十八年三月 金星堂刊行
三六五頁 定價三圓

× × ×

會報原稿募集

△締切 毎月二十日
△用紙 十五字詰のこと
△長さ 隨意なれ共餘り長いものは會報には不向 但し分載出來るものなら差支へなし
△右御諒承の上續々御寄稿乞ふ

會務報告

關西支部役員會

昭和十八年八月三十日午後六時
關西支部ルーム
中原繁之助、富田健一、粟飯原健三、西岡一雄、小川正十郎

一、山岳研究講座（冬山）出版ノ經過ニ就キ富田幹事ヨリ報告
一、特殊研究會設置ニ付西岡委員ヨリ提案並ニ説明アリ承認
一、關西支部豫算並ニ決算報告ノ件ハ擔當委員缺席ニ付次回ニ延期
一、十月ニ實地研究會開催ノ件
西岡幹事ニ一任

代表者事務所變更

日本アルカウ會
新代表者 小川正十郎
事務所 大阪市都島區都島本通三ノ一三五

受贈圖書

朝日新聞社編
山西學術探檢記

河崎珪一著
イラン

鐵道省編
日本北アルプス登山案内

右三册木村鐵吉氏

ハイキングペンクラブ著
山岳ノート 昭和書房

右發行所
足立喜六著
大唐西域記の研究（下卷）

ヘディン著
リヒトホーフエン傳

タイムス出版社編
中華民國滿洲帝國人名地名便覽

右三册 田邊主計氏

會員消息

岡部幹二氏 日本製鐵會社ボルネオ事務局勤務となる
衣川芳太郎氏 海軍司政官に任ぜられ南方派遣
山本保氏 大藏技師兼釀造試驗所技師に任ぜらる
松方三郎氏（滿洲國通信社理事長） 八月來上京中の處九月上旬歸任
黑田孝雄氏 應召中の處この程歸還
兼松學氏（大東亞省調査官） 九月中旬より約一ケ月にわたり蒙疆張家口、百靈廟方面に出張
小島烏水氏 滯米回想記を新文化九月號に執筆

山岳第三十七年第一號發行

山岳第三十七年第一號の發行は延引に延引を重ねて漸く九月下旬製本完了し前號會報と共に送本致しました。初の豫定より九ケ月後れた譯であります。會員諸氏に對し深く御詫び申上げます。ひどく後れはしましたが、今迄のものよりいさゝかも見劣りのしないといふ自信のあるものを御屆け出來た事だけは關係者の内心喜びとしてゐる所であります。

第二號もより一層立派なものをお屆けすべく努力して居ります。只こんな時代ですから發行期日は明言出來ませんが、第一號の經驗により十分注意して一日も早く御屆け出來るやうに努めます。

既に申上げてはありますが、山岳第三十七年は特に申込のあつた方以外本年度の新會員には御屆け致しません。昨年度の事業年度のものだからであります。右御諒承願ひ上げます。

編輯後記

もう秋になりましたが、まだなか〳〵むしあついことです。御かわりはありませんか。夏衰へた健康は秋にとりかへし、特に當節は、身體と神經を丈夫にしておくことが必要です。米の代りにイモやマメやウドンやいろんなものをまぜて配給して來ます。消化不良に陥つてゐる人も少くはありませんが、誰でも言ふやうに良く嚙んで食べることは確かに卓効のあることでせう。

本號は初校が出るまでに意外にひまがかゝつたゝめ發行がおくれました。從つて次號もおくれますが父せいだして追ひつくやうに致します。毎月二十五日頃に印刷場へ渡し十日頃に發行出來るとよろしいのですが、どうも思ふやうに參りません。

（田邊主計）

昭和十八年九月十三日印刷納本
昭和十八年九月十五日發行
頒價 ㊝ 二十錢

日本山岳會內
編輯者 田邊主計
發行者 塚本繁松
東京都芝區琴平町一（不二屋ビル）
發行所 社團法人 日本山岳會
電話（芝）一六四九 振替東京四八二九
會員番號 二二二〇三三
東京都神田區佐久間町三ノ三七
印刷所 株式會社 文唱堂印刷所
電話下谷（關）六七九五
會員番號 東東三三一七
東京都神田區淡路町
配給元 日本出版配給株式會社

塚本閤治著　日本山岳寫眞書

槍ケ岳へ

中部山岳の盟主槍ケ岳とそれを繞る山容を餘すなく著者のカメラアイは活寫した。記事下平廣惠氏（總論、地質、植物、動物、交通、山へ入る路、地形、溪谷、森林、溫泉、傳說、各コース案內）塚本氏筆油彩畫口繪一葉、略圖四葉入、目下發賣中

頒價 2.50　送料 .12

既刊　奥秩父（品切絕版）　白馬岳（1.90送12）
　　雪の上信國境（1.90送12）　奥日光（2.50送12）
近刊　丹澤の山と溪（2.50送12）　上越國境（2.50送12）

川崎隆章編

岳（たけ）

絕讚の名家山岳隨筆集、汲めども盡きぬ山への滋味、繪に文に詩に歌に、高らかにうたふ山岳頌歌、殘部僅少

序文・柳田國男　題簽・木暮理太郎　表裝・正宗得三郎　扉見返・中村清太郎　油彩畫口繪（阿蘇山）岡田三郎助　墨繪口繪（ミノチクコザクラ）・牧野富太郎

頒價3.80　送料.15

藤木九三著

登拜頌（とはいしゃう）

自然は悠久であるが山登りの相貌は一變した。この書は銃後岳人の爲めを道場とし岳人錬成に資す可く編輯されたものである。

內容＝錬成登山と國防以下九篇、夜不盡（詩）以下四篇

裝幀　石井鶴三

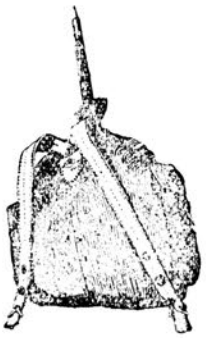
頒價 3.00　送料.15

近刊　山と溪谷社編「山岳辭典」　中村清太郎著「山岳渴仰」
　　中西悟堂著「鳥と山旅」　猪谷六合雄著「赤城の四季」

◇本社刊行物は書店へ御豫約申込又は直接本社へ御註文下さい◇

東京都芝區田村町6—4　山と溪谷社　電話（芝）543番　振替東京 60249番

キスリング型（E式）
ルックザック



御手元にある布地御持參になれば
御調製申上げます

山とスキー具專門
東都最古の專門店
東京都神田區神保町三ノ一（專修大學電停前）
片桐テント登山具店
電話 九段（33）三二一〇番
振替口座東京九一一八四番
店主 片桐盛之助